

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成20年8月28日

財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 生命科学研究所・生命文化学分野

職名・学年 博士後期課程1年

氏 名 標 葉 隆 馬

事業区分	平成20年度・国際研究集会派遣助成	
研究集会名	科学技術社会論学会2008年度年次研究大会	
発表題目	Analysis of the Whole Picture and the Dynamics of Japanese Newspaper Articles on Genetic Modification	
開催場所	オランダ王国・ロッテルダム	
渡航期間	平成20年8月17日 ~ 平成20年8月26日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有()	
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000 円
	使用した助成金額	200,000 円
	返納すべき助成金額	0 円
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	国際航空券代: 150,000円 ----- 宿泊費: 50,000円 ----- ----- ----- -----

京都大学教育研究振興財団国際研究集会派遣助成 成果の概要

報告者名：標葉 隆馬（京都大学大学院生命科学研究所生命文化化学分野博士後期過程 1 年）

今回、京都大学教育研究振興財団国際研究集会派遣助成の援助の下、参加をした国際会議は、Society for Social Studies of Science (4S) 2008 Annual Meeting という、科学技術社会論・科学計量学・科学社会学などを専門とする研究者における最大規模の国際会議であった。また、今回の会議は欧州科学技術社会論協会（EASST）の年会と合同で行われていた。開催地がオランダということもあり、欧州各国の研究者も多数参加していた。

今回の会議での報告者の発表では、“Analysis of the Whole Picture and the Dynamics of Japanese Newspaper Articles on Genetic Modification” というタイトルの元、日本における過去 20 年間の遺伝子組換え関連新聞記事を定量的な観点から分析した結果を報告した。報告者のセッションは、5 人から発表があり、全員がメディアに関する研究を行っており、更には 3 人が各国の新聞を定量的な手法を用いて分析を行っていた。

報告者の発表におけるポイントは、以下の 2 点であった。

- 日本の遺伝子組換え関連の新聞記事では、「医療」、「産業」、「食品」、「植物研究（特に遺伝子組換えイネの野外栽培試験）」という話題が中心的な話題であること
- これまでに 2 度、大きな中心的な話題の変化があること。
 1. 1997 年ごろ：「医療・産業」「食品」
 2. 2003 年ごろ：「食品」「植物研究（特に遺伝子組換えイネの野外栽培試験）」

発表の聴衆からのコメント、質疑応答は、今後の研究計画にとって有意義なものであった。聴衆の関心としては、特に 2 つ目の話題の変化（「食品」「植物研究（特に遺伝子組換えイネの野外栽培試験）」）に向けられた（また、この点は本研究で明らかになった特に新規な知見であり、ポイントである）。遺伝子組換えイネに関するトピックスが大きな話題として登場してきたということが、聴衆にとって興味の引かれる点であったようだ。

寄せられたコメントの中で、特に重要なものについて紹介したい。報告者の発表では、遺伝子組換えイネに関する最近の記事の傾向は、野外栽培試験という研究に近い文脈での記事が多いという点をポイントとして挙げた。その点について、イネという穀物が、食品の安全性といった観点との関連性がある可能性とその詳細についての疑問の提示がなされた。この点は、まだ明らかになっていない点であり、日本における遺伝子組換えをめぐるメディアの動向を分析する上で非常に重要な指摘であると言える（また、つい先日の分析で、80 年代～90 年代半ばにおいて、イネに関する話題が食品や産業といった話題と関連付けられて書かれていた可能性があることが示唆されたことも追記したい）。

加えて、新聞を定量的な側面から分析をしているポルトガルの研究者に（報告者と同じセッションで発表を行っていた）報告者の研究の方向について興味を抱いてもらうことができ、個別にコンタクトを取ることができた。現在の時点ではインフォーマルな形ではあるが、二国間比較を始めとした協働での研究計画を相談中であり、このことも本派遣の成

果として記しておきたい。

その他の成果として、London School of Economics (LSE) の研究者と行った議論を挙げたい。LSE の研究者が行っている研究は、単語間のネットワーク関係に注目して様々なテキストを分析するというものであり、さらには単語間のネットワーク関係を時系列に沿ってアニメーションで動かすというものも行われていた。この研究の方向性は、報告者が今後の研究計画としてイメージしていたものと合致しており、また特に後者の時系列でのネットワーク変化のアニメーション化は、どのように進めていくべきであるか非常に悩んでいた点であった。そこで学会会場の外で個別に時間を頂き、研究についての話を伺う機会を得た。議論においては、ネットワーク分析に必要な手法の詳細やこれまでの知見についてのレクチャーをしてもらい、また分析手法に関して説明をしているスライド資料も頂いた。また、単語に注目してテキストを分析している研究者が抱える一般的な研究の特徴や強み・弱みについても議論を行った。テキストを定量的な観点から分析する強みとしては、分析の手法を統一でき、またデータ自体を同じフォーマットで共有できる点が挙げられる。そのため、比較研究などを行うことが比較的容易となる。この点についても、話が出来たことは大きな収穫といえる。

報告者の行っている研究は、科学計量学と呼ばれる研究分野に分類される。しかし、科学計量学分野の研究者は日本では限られている。一方で、欧州は科学計量学分野の先進国といえる。先端的な研究を行っている科学計量学者と話ができ、情報交換ができたことは報告者にとって大きな刺激となった。

加えて、他の研究発表において、将来的な研究のアイデアを得た点を簡単に報告したい。他の研究発表において、マーケティングの理論とアクター・ネットワーク理論を結びつけるというものがあった。その発表の趣旨を大まかに言えばと、科学を取り巻く諸々の行為や状況をマーケティングの観点から分析・記述・解釈するというものである。実験をする、学会で発表する、論文を執筆する、グラントを獲得する、政府が新たな研究ファンドを提示する等々、科学を取り巻く諸々の行為・状況・政策は少なからずマーケティング的要素を持っているといえる。そこで、将来的な研究の方向性として、例えば政府による科学政策や、個々の科学者における研究活動の特徴をマーケティングの観点から分析することが考えられる。また、その中でも成功と考えられる研究や政策における特徴を、マーケティングの観点から分析することで、より良質な科学政策の立案への貢献といった展開も期待できるのではないかと考えられた。科学技術社会論の分野・ひいては自らの将来的な研究において、マーケティングの概念を取り入れた科学政策研究という方向性は検討すべき事項であると認識された。

以上、今回の派遣で得た成果の一部を簡単に紹介した。最後に、今回の国際研究集会への参加に際して、派遣助成を頂いた京都大学教育研究振興財団に感謝を記して、本派遣終了における成果報告としたい。